



今回の児童・生徒のコーナーは、光中学校の生徒の作品を紹介します。(敬称略)



3年 鈴木 正美

会津に生きた白虎隊

「ほら、あそこから白虎隊はこのお城を見て切腹したんだな。」私達は鶴ヶ城の双眼鏡から白虎隊のお墓を見ました。

私はバスの中のビデオで白虎隊を見、思いました。ある日、会津藩に少年の隊、白虎隊が生まれました。毎日毎日いろんな修行をして毎日毎日出陣の日を待っていました。どうしてそんなに陣出したいんだらう。だって陣出なんてしたらいつ死ぬかわからない、会津のためなんて言っただけで死ぬために行くのと同じだと思っていました。

ある日出陣がきまった時、白虎隊は大

喜びしたけど私だったらなんだか医者に死を宣告されたみたいだに思い悲しむでしょう。でも白虎隊の人だって親や好きな人と別れるのは、すぐくつらそうに見えませんでした。

その日から白虎隊は敵の藩に向けて会津の町を出ていったんだけどそこからさきは苦しいことばかり、いいことなんて全くなく、敵は銃を持ってるので、人は虫けらのように殺されるばかり、それでも、どんなに殺されても戦う姿は、とても力づくよく受けとれ、こうやってのんびり旅行をしていることがとてもわるいような気がしました。

それより重要な問題が出てきたのです。それは食料のこと。どんなに強くても、どんなに戦う気があっても何も食べずにというのには無理があります。だけど、そこが白虎隊のすごいところ。「ここで帰っては、弱音をはいてきたと思われそれこそはじ、しかしここで死ぬよりたおれるまで戦った方がいい。」なんて言うてなおも前進するのです。今の私ならすぐにも帰ってそれからまた陣出の命令があつたら出て行く、そうすると思いません。

そして再び敵に向かって出発するのだけれどへとへとなつてやつの思いで山からお城を見ると、

「お城が、お城が燃えてるー！」だれかがきんだのです。城は灰色の煙につつまれ火はその間から赤々とした炎をあげて燃えひろがっていたのです。白虎隊は全員ぬげがらのように地面にべったりすわり涙を浮かべながら燃えるお城を見て

いると一人がたちあがり刀を天高く上げ一気に自分の腹を真横に切り裂き、それを見て次々にみな切腹をしていきました。その中の一人が「また、会津で会おうな」この一言が今でも心にのこっています。

どうして同じ日本人どうしが殺し合わなければいけないのかと思います。

藩が負けたからといって白虎隊が死んでも時代には何のかわりもないのだから、そこからまたやり直せばいいのに、でもこのころの、子供までが殺されるという時の流れの速さはだれにも止められなかつたと思います。私の目には、この時代の人々はみな一生をかけ足で駆けぬけていくように映りました。

また、春が来て若葉が芽ぶくころ生まれ夏、草木がおいしげるところ再び出会うことでしよう。



3年 山崎 千恵

最後の舞台鶴ヶ城

一八六八年、戊辰戦争が始まった。これは新政府軍と旧幕府軍の戦いで、会津は旧幕府軍に属した。新政府軍は、鳥羽、伏見の戦いで勝ち、江戸城を戦わずに明けわたせた。更に今度は、軍を会津に向け進んだ。また会津は人手不足もあり、少年までもが白虎隊をつくり戦いの準備をした。

白虎隊は、出陣するのを今か今かと待ち受けていた。そして、ようやく、お許

しが出て陣出することができた。しかし、白虎隊はすぐ戦場へは出してもらえず山の中に穴をほりながら数日間を過ごした。それから、城からくるはずの食料は跡絶えてしまい、それを求めに、隊長が白虎隊から離れてしまったのが悲劇の始まりだった。

一晩たつても、隊長は戻ってはこなかった。戦うことを目的に出てきた白虎隊は、前進し、敵を母成峠で迎え撃った。一人もおびえる者はいない。みんな勇気を出し会津のために戦った。しかし、敵の数が多すぎる。とうとう白虎隊は後退してしまつた。もし、私達だったら、途中で逃げ出す人も出てくるだろうし、「会津のために死ぬるか？」と聞かれたところで「死ぬる」と言える人は、多くはないだろう。昔の人は、すごく勇気があるんだと思つた。お腹がすいても、がまんして、山道を歩き、またどこかで敵と戦つつもりで歩いていたのである。しかし、道に迷つてしまひながらも飯盛山の裏まで来た。みんな疲れていて「俺はここで腹を切る」と言う者まで出てきた。しかし、副隊長が「死ぬ時はみんな一緒だ。ここが死に場所だと思ふ者は？」というように決をとつた。数人しかいないから、城の見える飯盛山に登つた。白虎隊士達は、もう一度城が見たい。城に帰りたいと思つたのだらう。城が燃えている。会津が負けた。と思つた白虎隊士達は、次々と腹を切つたり首を刺したりして死んでいった。しかし、城はまだ燃えてはいなかつた。城の周りの武家屋敷が燃えただけだったので。会津は負けていなか